海外協定校連携科目群の構築による国際教育推進:
Virtual Study Mobility で広げる学びの場

関口　幸代・明治学院大学
sachiyos@ltr.meijigakuin.ac.jp

【概要】
国際的な視野を持ち、多様性・多文化理解力を高める人材育成を目指し、本学の海外協定校の学部正規科目を国内から遠隔で履修できるカリキュラム：海外協定校連携科目群を設置した。オンラインライブ授業を介して、海外協定校の科目担当教員の指導を直接受けることができ、現地の学生と共に授業を受講する仮想留学体験型学習環境の構築を目指した。本稿は、このプログラムの導入過程とその効果を評価することを目的とする。
キーワード：国際教育　教育 DX　仮想留学　Virtual Student Mobility　グローバル人材

１．教育改善の目的・目標

本学は、国際教育の一環として、国際的な視野を持ち、多様性・多文化理解を高める人材育成を目指している。このビジョンに基づき、国内外で実施するカリキュラムで学生がグローバルな学習成果を享受できる学習環境を提供することが重要だと考える。現在、長・短期の渡航留学プログラムや協定校からの留学生の受け入れ体制はある程度整備されている。しかしながら、渡航留学に参加できるのは、学科セメスター留学プログラム制度を持つ二つの学科の学生と、長期認定留学に参加できる一部の学生に限られている。また、経済的理由や実習の多いカリキュラムのため、長期渡航留学が困難な学生も多い。一方で、協定校からの留学生や在籍者数が少ない正規留学生と在校生が学内で共修できるプログラムは少ない。

そこで、国際的な視野を持ち、多様性・多文化理解力を持った人材を育成する戦略として、国内での学科カリキュラムと並行して、本学の海外協定校の学部正規科目を、教養課程の一部に組み込み、遠隔で履修できる海外協定校連携科目群を設置した。デジタルツールを活用し、オンラインライブ授業で、現地教員の講義をリアルタイムで受講しながら、現地学生と共に授業を受講する仮想留学体験型の学習環境を構築し、異なる国々、文化、価値観との教育的な連携を強化し、国内にいながら国際的な経験を得ることを目指した。本プログラムと同様の取組みは仮想留学（VSM：Virtual Student Mobility）と称され、ICT を利用して、国境を越えた、または機関間の学術的、文化的、経験的な交流と協力を促進する形態のモビリティであり、単位取得が伴う場合もあれば、単位取得が伴わない場合もあると定義されている[1]。すでにコロナ禍直後には、実際の留学との差別化・共存を目指し、パンデミック後の世界における新しい学習環境として注目が集まっていた[2]。本稿は、本学の海外協定校であるハワイ大学マノア校（UHM）と連携した VSM 型科目群を全学共通カリキュラムとして導入した過程とその学習効果を検証することを目的とする。

２．授業概要と教育改善の内容

（１）授業概要

本稿の対象科目となる海外協定校連携科目群は、国際的な視野を持ち、多様性・多文化理解を高める人材育成を目指して、2024 年度から全学部生対象・全学共通カリキュラムとして開設された。本学の海外協定校であるハワイ大学マノア校（UHM）から、年間 4 科目が共同授業として提供されている。

新カリキュラムの開始は 2024 度が初年度となるが、UHM との共同授業実施は、2020 年度に「教学改革のための学長プロジェクト」として学内の助成を受け開始された。2023 年度までの 4 年間に渡り、開発・実施が行われ、今年が実施 5 年目となる。2023 年度までの 4 年間で 3 種、9 科目を UHM から本学に提供してもらい、本学側はのべ 174 名が履修した。履修希望者数は履修定員を大きく上回るのべ 317 名であった。2023 年度までは国際学部科目として開講され、他学科履修科目として多くの学科に開放されてきた。しかしながら、学内での認知度は低く、履修者の多くは英語教育に重きを置く 3 学科に偏っていた。全学展開初年度となった 2024 年度からは、教養課程に組み込込まれ、年間 4 科目体制で開講し、履修定員 80 名（4 クラス総数）とした。4 月履修登録時、履修希望者総数は 140 名超であった。希望者の所属学科も 11 学科にわたり、全学対象科目として順調に拡張した。UHM 科目は 2 つのレベルで開講している。レベル 1 科目は入門としての位置付けであり、Department of Second Language Studies の中で学部入学準備科目などを提供する Hawaii English Language Program (HELP) が実施する。レベル 1 科目は本学生だけのクラス編成である。レベル 2 は、UHM 学部生と共に受講する、学部レベルの応用科目として位置付けられている。詳細は表 1 のとおりである。

表 1：海外協定校連携科目群詳細

学期	科目概要	レベル	単位数
春	MGUHM101 Academic Skills for Intercultural Competency ▸ハワイにおけるアジア系アメリカ人、ハワイ文化と歴史、移民に焦点を当て考える異文化理解	1	4
春	MGUHM201 Introduction to Ethnic Studies ▸民族社会学から考える多様性・異文化理解	2	4
秋	MGUHM202 Geography of Contemporary Society ▸移民社会的要素に焦点を当てた現代社会から見た地理学	2	4
秋	MGUHM203 Advanced Topics in Ethnic Studies ▸hafu”に重点を置いた混血のアイデンティティ、多人種の経験	2	4

（2）改善内容

2020 年度から 2022 年の 3 年間は、開設時期がコロナ禍と重なり、両校とも遠隔での授業形態が主となっていた時期であった。そのため、基本、UHM 現地生と本学生が共に学ぶ科目は、UHM 側はオンデマンド形式で開講されていた。日本国内でも対面授業が実施できない期間が長く続いたため、毎週の授業は実施されていたが、本学側の履修者のみが参加する Zoom を使用したオンラインライブ形式であった。本学側の授業では、UHM の科目教材を本学教員と授業補助者が日本語を介して解説を行い、Zoom の breakout room でのディスカッション等は本学生同士で行う形であった。この形式では、本学側の教員から丁寧な教材解説・課題指導を受けられる利点があるが、UHM 現地校の教員・学生との交流は基本非同期型でその交流も限定的であった。

開発前期 3 年間を経て、開発後期となる 2023 年度、本学の国際教育環境のさらなる向上を目指し、グローバル教育促進人材育成、学生の国際的視野の広がり、実践を通した異文化理解力の促進、仮想空間での柔軟な擬似留学環境の提供するために、実施方法を一新した。まず、全科目、両校の履修者が同時に参加するオンラインライブ型の同期授業形式とした。日本側の開講時間を午前中に設定することで、日米の開講スケジュールを同期させることができた。毎週、UHM 教員の講義を、両校の履修者がクラスメートとして同時に受講し、クラス内外のグループタスクも日米混合チームメンバーとして活動することができるようになった。さまざまなウェブ会議システムが利用可能であったが、このプログラムでは Zoom のプロアカウントを利用した。Zoom 自体、使い慣れたツールであり、また、グループディスカッションや代替ホストなど、共同授業実施のための機能が充実していることも採用した主な要因であるが、一番の理由は、次に提示する英語講義対応をサポートできるさまざまなツールが活用できることであった。

リアルタイムで受講する英語講義をサポートは、Zoom のオンラインライブ授業時に、リアルタイムで字幕・翻訳版字幕機能を活用した。字幕・翻訳機能は使用言語（英語）と母語（多くの履修者の該当言語は日本語だったが、それ以外の選択も可能）の表示を参加者が自由に選択できるようにした。また、録画した講義動画はクラウド上に保存でき、授業後にリンクを共有し、復習のために容易に活用できた。担当教員の講義、授業内でのディスカッションは、発話者の画像だけでなく、授業と同じようにスクリーンシェアを含めた形態でも配信され、字幕・翻訳機能付きで繰り返し閲覧できる環境を整えた。また、発話者別の発言を文字情報（英語・母語対応）でも閲覧できるようにした（図 1 参照）。この科目は語学としての英語科目ではなく、英語はツールとして使用するというスタンスである。履修に必要な英語力の一定の指針は示されてはいるが、プログラムは全学の学生に開講されている。その点を考慮し、オンデマンドのように個々のペースで時間をかけて教材と対応できない負担を軽減するための対策を行なった。このような形態の講義動画を配信することにより、開発前期のような日本側だけで日本語での講義を行わず、履修者が自律した学習者として、個々のペースで学習を進めることができるようサポートした。

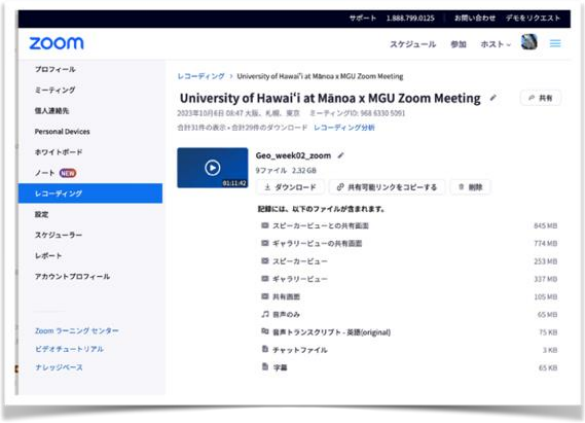

図 1： Zoom クラウド録画機能

LMS に関しても二つの大学の学生が共に学習できる環境を整えた。本学生には UHM の LMS のゲスト利用が許可され、UHM 生と同様のアクセスが可能とし、UHM の教員が、通常行うように現地校

の LMS を介し、UHM 生、本学生に UHM の LMS である Laulima [3]から教材・コンテンツを提供した。担当教員との交流、学生間のグループワークも Laulima を介して行われた。UHM のシステムを利用し、現地の学生と同じ課題、内容に同時期に取り組み、担当教員との、また、学生間の交流を円滑に行える環境を構築した。UHM 生の履修生には科目登録段階から、本学の学生との共同授業であることが明記されている。本学生用に開講されている 4 科目全ては多様な価値観を持つ社会への理解を促すものであるため、実践を通し多様性を理解する力を高める学習環境を求める UHM の学生が履修している。UHM 担当教員から、本学との共同授業は、現地生にとっても肯定的な学習体験を供給しているという所見も毎学期末に届いている。科目サイト内には、本学の学生に特化したページも作られており、2 大学参加科目のコンセプトが現地生にも強く打ち出され、また、本学生への受け入れに対する温かい配慮もされている（図 2 参照）。

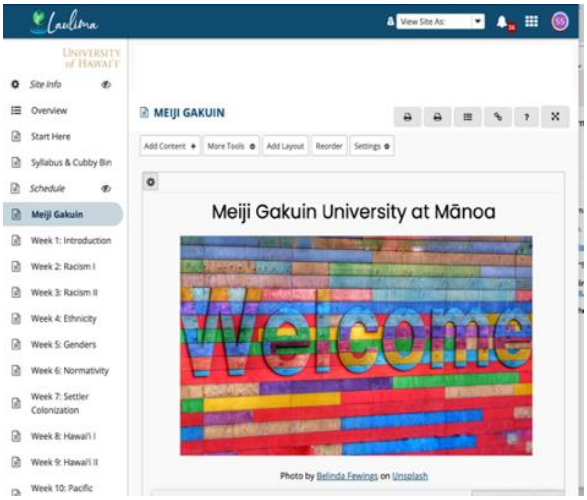

図 2：UHM LMS Laulima

３．教育実践による教育効果とその分析

本学履修者の学習活動を振り返り、科目の向上に反映させるために、オンラインアンケート回答を任意で毎学期修了時に実施してきた。本稿では、2023 年度（春・秋学期）、2024 年度（春学期）に開講したレベル 2、3 科目の結果を考察する。

3 科目履修者 57 名中に対し、研究協力を承諾しアンケートに回答した人数は 42 名、回答率 74%であった。アンケートは、コース内容全般、教材・課題難易度、UHM との合同授業受講関連、学習成果、オンラインライブ型同期授業に関する学習環境、現地教員・学生との交流、仮想留学体験などについて設問が設定され、履修者の学習活動を総括的に検証した。参加者の意見を多角的に評価するために、リッカート尺度を用い、また、各評価項目に対して、参加者が選択した理由を自由記述形式で回答を促した。これは、各評価の背後にある具体的な理由や背景情報を収集することが目的であった。

表 2 が示すように、コース全体への満足度は中央値が 4.0 で、多くの履修者にとって、満足のいく学習体験であった、学術分野への関心が高まり（中央値 5.0, 平均値 4.6）、新しい知識・知見を得て、学びが深まった（中央値 5.0, 平均値 4.6）と感じる履修者が多く、履修体験を肯定的に捉えている。 英語での UHM 学部科目の受講の難易度は高く、表 3 が示すように、コース全体、講義、課題に関し、「難しい」を選択する履修者が多く、コースの難易度の関する中央値はすべて 4.0 という結果となった。 反面、表 4 が示すように、アカデミックスキル全般の向上に関する項目では中央値 5.0 という結果であった。難しい内容に取り組んだからこそ、学習効果を実感できるとした回答・自由記述も多かった。課題として頻繁に課されるプレゼンテーションや毎授業内でグループセッションの後の全体会での発言、意見交換が求められるため、英語での発言力の向上に手応えをもった学生も多い。さまざまな課題に対応する難しさを感じながらも、全力で取り組んだという自由記述が多く確認された。

表 2：コース内容への満足度　とてもそう思う（5）～　全くそう思わない（1）

設問	中央値	平均値
このコース全体への満足度	4.0	4.1
学術分野への関心の高まった	5.0	4.6
コースの内容は自身の学びに対し、有益であった	4.0	4.4
新しい知識・知見を得ることができた	5.0	4.6

表 3：コース難易度　とても難しい（5）～　とても易しい（1）

設問	中央値	平均値
コース全体の難易度	4.0	3.8
講義難易度	4.0	3.7
課題難易度	4.0	4.0
課題量	4.0	4.4

表 4：学習効果　非常に向上した（5）～　全く向上しなかった（1）

設問	中央値	平均値
コース内容に関する知識	4.0	4.5
アカデミックスキル（全般）の向上	5.0	4.5
アカデミックスキル：リサーチスキル	4.0	4.1
アカデミックスキル：プレゼンテーション	4.0	3.8
アカデミックスキル：授業内での意見交換、発言力	4.0	4.2

表５：ハワイ大学教員・学生との交流　非常に満足（５）～　不満（１）

設問	中央値	平均値
ハワイ大学の学生との活動に対する満足度（全般）	4.0	3.8
ハワイ大学の学生との活動の難易度	3.5	3.5
ハワイ大学教員との交流（全般）	4.0	4.0
教員への質問など個別対応に対する満足度	4.0	4.3
教員からの課題フィードバックに対する満足度	4.0	4.1

表６：ハワイ大学LMS使用状況　非常に満足（５）～　不満（１）

設問	中央値	平均値
アクセス方法	4.0	3.7
全体的な使い方（全般）	4.0	3.6
課題提出の方法としての使用感	4.0	3.6
授業教材へのアクセス	4.0	3.9
UHM教員とのコミュニケーションツールとして	4.0	3.6

表７：遠隔授業に関する学習環境　全く問題がなかった（５）～多くの問題があった（１）

設問	中央値	平均値
ZOOMを使ったUHMとの遠隔での合同授業	5.0	4.5
ZOOMを介した海外の教員との遠隔授業への適応	5.0	4.4
学内同一教室での一斉受講環境	5.0	4.4
国内の教員・TAによるサポート体制	5.0	4.4

本学生が UHM 教員・学生と、共に学び、交流をオンラインライブ授業の形式で適切に対応できているかについても注意深く検証した。表５に示されているように UHM 生との活動全般について（中央値 4.0, 平均値 3.8）、本学生は遠隔での対応であっても、「大変満足している」を選択した回答者が多い。自由記述から「海外大学の学生と授業を受け、ディスカッションをしたり、TA から個別にメールでアドバイスをいただいたりして、貴重なら体験をすることができた（被験者＃2024_36）」「他の学生の意見を課題のディスカッションから閲覧することで、多くのことを学ぶことができた。（被験者＃2023_13）」など学びの場として機能していることがわかる。また教員との交流についても満足度が高い結果となった（中央値 4.0, 平均値 4.0）。UHM 教員とは課題へのフィードバックの対応も含め、この学習環境下で適切な交流が可能であったことが確認できた。

学びのポータルとして使用された UHM の LMS は、本学の学生の通常のツールとは異なるが、表６に示されているように使用に関して大きな戸惑いは見られず、全体的な使用感、課題対応、教員とのコミュニケーションにおいても有効に使用されていたことがわかる。表７からは、学期を通して海外協定校とのオンラインライブ授業が問題はなく遂行されたことと考えられる。Zoom を介しての遠隔授業を遠隔に実施するため、本学側で履修生に向けた事前講習やテクニカルトラブル対応のための TA の配置などサポート体制を整えたことが適切な学習環境の運営につながったと考えられる。このような学習体験を仮想留学体験として捉えていることができたかという設問に関しては、中央値 4.0、平均値 4.1 という結果になり、「実際に、ハワイ大学マノア校で民族学を学んでいる学生とともに、専門の教授から授業を受けることができたから（被験者＃2023_08）留学しているような感じでした」というように体感できた履修生も多い。

４．結果の考察

本稿では、海外協定校と連携した仮想留学型科目の導入とその学習効果について検証した。調査結果から、履修者が高い満足度と学習効果を実感していることが示された。特に、2023 年度から改善された形式での UHM の学生や教員とのオンラインライブ型授業での定期的な交流や学術分野への関心の高まりが学生の国際的な視野の拡大に寄与したことが確認できた。また、デジタルツールの効果的な利用により、海外との大学の遠隔授業が円滑に運営されたことが確認された。今後も UHM の該当学部・担当教員と連携しながら、本学の正規カリキュラム[4]運営に尽力したい。

謝辞

海外協定校連携科目群設置ワーキンググループにご尽力いただいた本学教職員の皆様に深謝いたします。

参考文献および関連 URL

[1]UNESCO Virtual Student Mobility https://www.iesalc.unesco.org/en/vsm/（2024 年 7 月 24 日参照）
[2]UNESCO Future of international mobility will combine physical and digital experiences to reach a wider range of students https://www.iesalc.unesco.org/en/2022/02/25/future-of-international-mobility-will-combine-physical-and-digital-experiences-to-reach-a-wider-range-of-students/（2024 年 7 月 24 日参照）
[3]ハワイ大学 LMS Laulima https://laulima.hawaii.edu/lum/fp/login.php （2024 年 7 月 24 日参照）
[4]海外協定校連携科目群詳細 https://www.meijigakuin.ac.jp/academics/vsm/ （2024 年 9 月 30 日参照）